

## 「セブンスター」の煙に希望が見えた

先日、私立高校受験の願書を提出し、明日からいよいよ入学試験が本格的にスタートします。そして、その合否結果も含めて、来週にはあらためて3年生の三者面談が予定されています。まだまだ、進路希望先が確定しない生徒もいるようですが、受験や今後の進路については、学校と家庭との良好な信頼関係をもとに、最大限サポートしていく大事な局面だと考えています。

今から20年以上も前の三十代の頃に、3年生の担任だった時のエピソードです。

クラスのある男子生徒が、ある部活動の強豪校である私立高校への進学を熱望していました。彼は愛すべきナイスガイのスポーツマンでしたし、私も、その競技での彼の高校での活躍を心から期待していました。

ところが、三者面談でも、その彼の進路選択を頑として父親が反対していたのです。お母さんを小さい頃に亡くし父子家庭であったこともありましたが、一番の反対の理由は経済的ものでした。

当時、その学校での推薦等での授業料免除の道はなく、本人からは、「先生、絶対に〇〇高校に行きたいんです。何とかオヤジを説得してもらえませんか。」と強く懇願されました。

数日後、家庭訪問をして父親に向き合いました。お父さんは、外見は高倉健のような、一見するとコワモテでどちらかというと不愛想な人でした。自身の土建関係の仕事やこれまでの一人手による子育ての苦勞、経済的な家庭事情等々、訥々と語ってくれながら、「先生、うちに子どもを私立に入れる余裕なんてないんさ。」と言うばかりで、いろいろ説得を試みたものの、彼の進路選択を認めてくれるまでには至りませんでした。

やりとりが続いてしばらくお互い沈黙の時間が流れました。お父さんは、かなりのヘビースモーカーで、ガラスでできた灰皿には、時間とともに吸い殻が少しずつたまっていきました。渋い顔をしながら私に対応していましたが、タバコをふかす姿は映画俳優のよう

にかっこよく、惚れ惚れするほど実においしそうに吸うのです。

喫煙者にとっては肩身が狭くなった昨今、社会の隅へ隅へと追いやられる感のあるタバコの存在ですが、当然喫煙する権利も十分尊重すべきで、個人的には、人それぞれの嗜好品として、他人に迷惑をかけなければ特に問題ない代物と思っています。もちろん未成年者の喫煙は絶対に認められませんが。

かくゆう私自身も、大学時代から社会人としてスタートした銀行員時代、そして教員になってしばらくはタバコを吸っていました。特に、銀行員時代は、タバコは、営業マンとして商談の間をつなぐ必須アイテムでありました。社会的にも、飛行機や電車・バス内でも喫煙が可能であったり、ポイ捨てなんて当たり前の時代だったのは今では信じられないことです。

教員になってから、教え子の中の喫煙常習者への指導に苦労したのをきっかけに、自分もタバコとの縁を切りました。

さて、話を元に戻します。

長い沈黙の後、説得も虚しく感じ、あきらめて帰ろうとした最後に、お父さんと次のようなやりとりがありました。

「お父さん、実に美味しそうにタバコ吸いますね。」「あー、うまい。これだけはやめられないよ。」「私にも一本いただけませんか。」「お、先生も吸うのか。」「いやもうタバコをやめてから随分経つんですが、あまりにもお父さんが美味しそうに吸うもんで。」「そうか、ほら1本。」

とって、何年かぶりのタバコを口に運び、オヤジさんが火を点けてくれました。正直、数年ぶりのタバコが美味しいとは決して思えず、久しぶりだったので、頭がくらくらするようでした。

「ところでお父さん、タバコは、一日どれくらい吸われるんですか?」「まあ、1日で2箱くらいのペースかなあ。」「というと、1日で500円、ひと月で15,000円、一年で18万円くらいですね。」「そんなんか。まあ1年にすると結構かかるもんだなあ。」「……………」

「お父さん、タバコをやめたら、息子さんの授業料くらい何とかなるんじゃないんですか?」と言った瞬間、オヤジさんのタバコの先にたまっていた長い灰がポロっと畳に落ちました。

すると、オヤジさんはいきなり大声で笑いだし、「先生っておもしろい人だな。わかったよ。子どもという通りにするよ。でも、タバコはやめないよ。他のところで何とかするよ。」と話をしてくれました。そして、「もう話は終わりだ。腹が減った。」と言って、夕飯の

時間だから飯でも食っていけど、野菜と卵と肉をたくさん入れたインスタントラーメンに大盛のライスを添えて、夕飯をごちそうしてくれました。インスタントなのに、後にも先にも、あんなに美味しいと感じたラーメンはありませんでした。

手塩にかけて長い年月と労力をかけて育てた最愛の我が子が、どのような進路を選択するのか、どのような人生を歩むかは、経験豊富な人生の先輩である身としても心配でならないのは親として当然です。受験料や授業料を出す立場からも、進路の決定には大いに関与せざるを得ません。

しかし、進むべき場所に進むべき方向を見つけ、その上に進むべき強固なレールを敷いてそのレールを走って進むのは、生徒自身なのです。つまり、生徒の進路や人生は生徒自身のものであり、親や教師のものではありません。親が敷いたレールの上でなく、生徒が自分の自分による自分のための敷いたレースを突き進むことができるように、最大限の理解と支援、そして叱咤・激励を最後までぜひともお願いするものです。

その後、そのオヤジさんがタバコをやめた形跡はありません。しかし、生徒は無事志望校に合格し、充実した3年間の高校生活を送りました。昭和時代のニヒルで武骨な愛すべき頑固オヤジとの、ただただ懐かしいひとコマ。

お父さんがつくってくれたラーメンを二人で食べた後、すぐさまオヤジさんは満足そうな表情で食後の一服に入りました。その表情を見て、私は何故か目頭に熱いものを感じました。決して、タバコの煙が目に沁みたわけではありません。